

仏教通信「涅槃会(ねはんえ)について」2月

2月15日は、お釈迦さまがお亡くなりになった日で、仏教では、その日を「涅槃会」と呼び、お釈迦さまの徳を偲ぶ日です。「涅槃」とはインドの言葉の「ニルヴァーナ」の音写で、それは「煩惱の火が吹き消された悟りの境地」のことであり、もう一つは「生命の火が吹き消された入滅・死去」のことです。例えて言うと「真夏の太陽が照りつけている道を歩いていて、クーラーの効いた涼しい休憩所に入ってホッとする」状況も「ニルヴァーナ」であり、「ヴァーナ」は熱気(火・炎)のことであり、「ニル」はそれが無くなることです。ニルヴァーナはまさに人生の苦悩のもととなる肉体・欲望から離れた状態をあらわします。

さて仏伝によれば、今から約2500年前、お釈迦さまは80歳の高齢になっても、弟子たちと伝道の旅をしていました。旅の途中で立ち寄ったベーサリー郊外のペールバ村に、鍛冶屋を営む奴隷階級のチュンダという青年がいました。チュンダは、お釈迦さま一行が、身分の低い我が家に立ち寄ってくれたことに感激し、料理を振る舞いました。しかし、貴族階級出身であった弟子たちは「奴隷に振る舞われた料理なんか食べられるか」と偏見にこり固まっており、誰も手をつけようとしなかったのです。そのチュンダの料理を、お釈迦さまが率先して食べたのは、「仏の教えを求めめる者に身分は関係ない」と弟子達をさとすのが目的であったと言われていています。ただ、この料理には「スーカラ・マツダヴァ」という名の毒キノコが混ざっていたため、お釈迦さまは体調をこわされ、急激に体力が奪われていきました。床に伏したお釈迦さまを心配した弟子達は、口々に「先生が亡くなった後、誰に導いてもらえば良いのだろう？」と、心細そうに話しました。そんな弟子たちを集めて、お釈迦さまは「自燈明(一人一人が自らを燈とし、まわりに流されることなく自らの人生を歩みなさい)、法燈明(人生に迷った時は、今まで学んだ真理(教え)を、我が師として前に進んでいきなさい)」という言葉を残しました。お釈迦さまは、サーラの樹の間に横たわりながら、最期のその時まで「目標へ向かって一生懸命に努力することが大切である」と弟子達に説きました。なすべきことを全てなし終えたお釈迦さまは、ついに2月15日に涅槃の時を迎えるのでした。

この「涅槃会」にあたり、私達は自らが燈となり人のために尽くせるように心掛けると共に、「私」という存在は多くの人達の燈に導かれ「今」があると感謝しないといけません。「生かされて生きている」ことに気付くのが仏の教えです。合掌

今年の涅槃会は2月16日(金)に行います。

小学部礼拝委員会

